

復活節第二主日

2011.5.1

ヨハネ 20・19-31

先週の日曜日、私たちは復活祭を祝いました。私たちが祝った復活祭の喜び、私たちが信じる主の復活が私たちにもたらしたはずの喜びは、今、私たちの中で、どのようになっているのでしょうか。

今日の復活節第二主日のミサの中で、私たちは、ヨハネ福音書に記されている、二度にわたる復活された主の弟子たちへの訪れについて聴きました。イエスを十字架に追いやった人々を恐れて、戸口に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちの真ん中に立たれた主は、「あなた方に平和がるように」と呼びかけてくださいます。あの時、彼らは自分たちの中に立って、そう言うてくださる主を見て喜んだのです。けれども、それから八日目に、再び復活の主をお迎えすることになった時にも、部屋には依然として鍵がかけられていたのです。

最初の主の訪れの時にその場に居合わせなかったトマスは、その閉ざされたままの部屋の中で、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」と言い張り続けたのでした。トマスの気持ちが分かるような気がします。トマスは他の誰よりも、頑なで、疑い深かったということではないと思います。他の皆が「私たちは主を見た」と言っているのに、自分はその場にいなかったという、とり残された疎外感がトマスをあのように頑なにしたとも考えられます。けれども、あの閉めきられたままの部屋の中で、「私たちは主を見た。」「私たちは復活された主とお会いした」と言っている人たちの言うことを、誰がそのまま信じる事が出来るのでしょうか。復活の主を喜びのうちに迎えたはずの弟子たちを包む空気は、その彼らが醸し出す雰囲気は、少しも変わっていなかったのです。そのような仲間たちが言うことを、トマスでなくても誰が信じる事が出来るのでしょうか。

「あなた方に平和があるように。」これが、閉めきった部屋に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちに復活の主がもたらして下さった平和の挨拶です。「自分は信じない。自分には信じられない。」と言い張っていたトマスの心を開いて下さった、復活の主の平和の挨拶です。この平和の挨拶をもたらすために、復活の主は、ご自分を十字架の上に見捨てたままにして、自分たちも同じ目に会うことを恐れて、鍵つきの部屋に閉じこもっていた弟子たちのもとを訪れて下さったのです。復活の主からの平和の挨拶は、弟子たちの心に、真実平和をもたらします。けれども、復活の主がもたらして下さる平和が、あのトマ

スも含めて、弟子たち皆の心を満たすためには、二度にわたる復活の主の訪れが必要であったと、今日の福音は告げています。復活祭は、それを祝う私たちの側に、それを祝う理由があって祝われる祝いではありません。復活祭は、復活された主からの平和の挨拶によって私たちにもたらされる平和に満たされて、そのことを喜び合う祭りです。それゆえに、復活祭の喜びは他の歴史上の出来事の記念日のように、復活祭当日に、いわば限定されているものではありません。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をそのわき腹に入れてみなければ、私たちは決して信じない。」と言っていたトマスが、「わたしの主よ、わたしの神よ」と信仰の叫びを上げることができたのは、一週間たって、今度はトマスも一緒にいるところに、復活の主が再び訪れてくださったからです。その主が、トマスに向っても平和の挨拶を送ってくださり、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と語りかけてくださったからです。その時、復活の主は、自分の肉眼でその復活の主を見ているトマスの心の目をも開いてくださって、トマスが自分の目で見ることの出来たお方を信じる者としてくださったのです。その上で、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」と言われたのです。こうして、十二人の弟子たちの中で、最後に復活の主への信仰に導かれたトマスは、弟子たちの宣教によって復活の主への信仰に導かれることになった、その後の私たち全ての者たちの、いわば先駆けとされたのです。トマスにとって、そしてトマスを仲間に加えた他の弟子たちにとっても、あの二回目の復活の主の訪れが十全な形で主の復活を喜び合う機会となったのです。

十字架につけられて死んだ神の子イエス・キリストの復活は、弟子たちが体験したことに留まるものではありません。確かに彼らは、復活の主を自分たちの中に迎えることによって、自分たちがその場から逃げ出した、あの十字架の傷跡を残す復活の主イエス・キリストからの完全なゆるしと平和を経験したのです。しかし、それだけではなく、彼らがそのゆるしと平和に完全に満たされるために、復活の主は、十字架上に死んで復活された、ご自分の神の子のいのちそのものである聖霊を弟子たちの中にも吹き入れてくださったのです。最初の人アダムが、創造主である神がそのいのちの息吹を吹き込んでくださることによって生きる者となったように、弟子たちは今や復活の主のいのちの息吹である聖霊を吹き込んでいただくことによって、彼ら自身のうちに復活を体験した者たちとされたのです。彼らは、復活の主の息吹を受けて、それまでの古い自分たちのあり方に死んで、新たないのちに生き始める新生を経験したのです。イエスの復活は、アダムの罪を引きずるこの世界に、イエスの復活によってもたらされた、そのような新しいいのちを生きる人々を生み出したのです。そし

て、そのような新たな復活のいのちに満たされた人々を、この世界に実際に送り出してくださったのです。

彼らが復活の主により送り出されて、宣べ伝えたことは、彼ら自身が復活の主によって経験させられたことです。彼らは、自分たちが十字架の上に見捨てた、その手と足とわき腹にいまだにあの十字架の傷を残す復活の主が、何事もなかったかのように、「あなた方に平和があるように」と呼びかけてくださったことの証人となったのです。その復活の主が与えてくださるゆるしと平和を信じて、身を委ねることができるなら、人は自分の過ちによる如何なる失敗と挫折を経験しても、そこから立ち上がる力を見出すことが出来るということを力強く宣べ伝える者たちとされたのです。それだけではなく、そのような復活の主の絶対的なゆるしを体験した者たちとして、彼らは、如何なる困難があろうとも、相互に受け入れあい、ゆるしあえる人間同士の共同体を作り上げて行く者たちとして、復活の主によってこの世界に送り出されたのです。

その彼らの行く手を支えたものは、この世の力によって十字架に追いやられ、葬り去られたイエスを死者の中から復活させ、自分たちの前に立たせてくださった神の全能の力は信じるに値するという確信です。

自分たちは、復活の主イエス・キリストによって、イエスを死者の中から復活させた神の全能の力を吹き入れられ、新たないのちを生きる者たちとされたという信仰に基く自覚です。

それゆえに、彼らは、自分たちが生身の肉の体において経験するあらゆる苦しみと悲しみは、イエスの十字架においてそうであったように、神のいのちとの完全な一致に至るための、大いなる希望に向って開かれた、自分たちにとっての十字架の道、神によって与えられた試練なのだと思えることが出来るようになったということを、彼らの全生涯をかけて証する者たちとなったのです。

復活の主によって弟子たちの前に開かれたこのような信仰は、その弟子たちの宣教によって始まり、教会を通して私たちに伝えられた、私たちの信仰でもあります。今このような状況の中にあるこの国の全ての人の中で、イエス・キリストの復活によってもたらされた、このような信仰に基づく希望を生き、証する使命を私たちは受け継いでいるのです。その使命を生きる力を、私たちが信じている、私たちの真ん中にいてくださる、復活の主に願い求めてこのミサをおささげしたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高